

人生の転機について

山 本 典 子

I. はじめに

人は生きていくなかで、さまざまな転機に遭遇する。厳密にいうと、人生は大小様々な転機の連続体であり、人は普段はそれをあまり意識することなく、あたかも1本のまっすぐで平坦な道を歩いているがごとく淡々と生活を営んでいるのだが、環境が大きく変わったり、重大な選択を迫られたり、大事にしていたものを犠牲にしなければならなかったりしたときに、その事実が自分の人生の中に起きた重要な出来事として認識され、やがてそこが転機となって歩みの方向や速さといったベクトルの変化が意識されることが多い。

なかでも、大きな苦しみを伴う出来事が人生に与えられた場合、人はときに苦悩を前に立ち止まり、絶望の淵に立ったかのように感じたり、人生そのものの意味がわからなくなってしまったり、生きる気力すら失ってしまったりすることもあり、その変化を転機というよりも、まるで人生の終止符であるかのごとく受け止めてしまうことさえある。

しかし、人間は、苦悩をこそ契機として、自らを成熟させ、新たな人生を切り拓いていくべき力が本来的に備わっている存在である。なぜならば、人間は誰しも、自らの人生を生きがいある、意味のある人生にしたいという意志を有しているからである。Frankl (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) は人間のその意志を「意味への意志」とよび、その本質を問いつけた。

拙稿は、Frankl の思想を手掛かりに、人間が様々な苦悩に満ちた人生の転機をいかに生きていくかということについて論じるものである。

II. Frankl による「意味への意志」

Frankl は著作や講演で、彼自身のナチスの強制収容所における体験をもと

に、生きる意味や価値について多くの論を展開している。そこでは、「偉大な英雄や殉教者の苦悩や死」ではなく、「おびたしい大衆の『小さな』犠牲や『小さな』死」、「『知られざる』収容者の受難」が語られている。

強制収容所では被収容者たちは、人間性を否定され、常に死の恐怖に晒され、未来の展望の開けぬ極限状態におかれている。「精神的に追い詰められた状態で、露骨に生命の維持に集中せざるをえないというストレスのもと」(Frankl, 1977, 46 頁)、被収容者たちは、「みずから抵抗して自尊心をふるいたたせないかぎり、自分はまだ主体性をもった存在なのだということを忘れてしまう」(Frankl, 1977, 82 頁)。このとき、「おおかたの被収容者の心を悩ませていたのは、収容所を生きしのぐことができるか、という問いだった。生きしのげないのなら、この苦しみのすべてには意味がない、というわけだ。しかし、わたしの心をさいなんでいたのは、これとは逆の問いだった。すなわち、わたしたちを取り巻くこのすべての苦しみや死には意味があるのか、という問いだ」と Frankl は述べている (1977, 113 頁)。

強制収容所にあっても、また、人生最期の瞬間においても、「生を意味深いものにする可能性」は開かれており、数値にすれば限られたわずかの人数だったかもしれないが、「完全な内なる自由を表明し、苦悩があってもこそ可能な価値の実現へと飛躍できた」人もいた (Frankl, 1977, 114 頁)。それは、人間が本来的には「常に生きる意味を探し求めている」存在、「意味への意志」(Frankl, 1979, 33 頁)をもつ存在だからだといえるのではなからうか。

ここで思い起こすべきは、Frankl の著書の表題にもなっている「それでも人生にイエスという」という言葉である。この言葉自体は、元々、ブーヘンヴァルト収容所の囚人たちが作った歌の歌詞の一部であり、彼らはそれをただ歌ったのみならず、様々な仕方で行ないにも移したとのことである (Frankl, 1947, 161 頁)。収容所生活の中で、「生きる目的を見出せず、生きる内実を失い、生きていてもなにもならないと考え、自分が存在することの意味をなくすとともに、がんばり抜く意味も見失った人」が決まって口にするのは「生きていることにもうなんにも期待がもてない」という言葉であったが、「ここで

必要なのは、生きる意味についての問いを 180 度転換することだ」と Frankl は言う (1977, 128-129 頁)。カントの言葉に倣って「コペルニクス的転回」とも言われる、Frankl の思想の中核をなす発想の展開であるが、人間は生きる意味を人生に問うべきなのではなく、「人生こそが問いを出し私たちに問いを提起している」のであって、「私たちは問われている存在」であり、「生きていることに責任を担う」べき存在であるということなのである (Frankl, 1947, 27-28 頁)。人生はそれ自体意味があるので、どんな状況にあっても、人は人生にイエスという意味があり、イエスということができる、と Frankl はこの著書で結論づけている (1947, 162 頁)。

強制収容所においてのみならず、平凡とも思えるような日常生活においても、人間はいつ、どこにいても絶えず運命と対峙させられ、時々刻々と問いかけがなされ、応答を迫られている。「生きるとはつまり、生きることの問いに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない」と Frankl は言っている (1977, 130 頁)。運命は、それぞれの人間に、それぞれの状況ごとに、生きる意味への問いかけをおこなってくる。その問いかけに対して、わたしたち人間は、言葉を弄するのみで答えることはできず、「適切な態度」、「具体的な」行動による対応が迫られる (Frankl, 1977, 130 頁)。そして、どう行動するか、何をしうのか、どうふるまうべきなのか、ということは、最終的にはその人がどういう人間であるのかということにかかっている。その人が本来どういう人間であるのか、富や名声、権力、虚栄、野心、縁故などといった「本質でないもの」がすべて抜け落ちた人間の姿を、Frankl は「裸の実存」という言葉で表現している (1947, 12-13 頁)。ありのままの姿である「裸の実存」に連れ戻された人間が、自分の運命を受けとめ、生きる意味を自分の存在においていかに実現するかということが、各人に課されているということである。

C.G.Jung が著書『ヨブへの答え』において示している、旧約聖書の「ヨブ記」の解釈も、Frankl の「意味への意志」に関する論と共通点が大きいと考えられる。旧約聖書の「ヨブ記」に関しては、古来よりユダヤ教やキリスト教

の立場から、神が信仰心篤いヨブに与えた苦難の意義づけについて多くの論がなされているが、Jung は、神から与えられた理不尽ともいえる苦難を前にしたヨブが発した秩序への問いかけによる神の変容に焦点をあてている（山本、2011）。ヨブ記のあらまははこうである。神はサタンに挑発され、ヨブの忠実を証明するために、ヨブをサタンの手にゆだねる。ヨブは次々に襲いかかる災厄に苦しみつつも、自らの正しいことを主張し、神を呪うこともなく、ただなぜ自分がそのような理不尽な試練をうけなければならないのかという問いを発し続ける。すると神がヨブに「あなたは腰に帯して、男らしくせよ」（ヨブ記 38：3）と語りかけ、神とヨブとの直接の対話が始まる。そして、ヨブが神に「私は知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。（中略）わたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います」（ヨブ記 42：2－6）と答えたところで2人の会話は終わる。その会話の後、神はヨブにくださった全ての禍についてヨブをいたわり、以前ヨブが持っていた以上の財産や子供を与えた、というのがヨブの物語である。このヨブ記の結末は、Jung の解釈では、理不尽な苦難を次々に与えられても最後まで毅然として自らの立場を明らかにし、主体的に運命を受け容れることにこだわり続けたヨブに神が脱帽したということであろうと考えられる。ヨブは神の全能を依然として信じながらも、神の本当の姿を経験し、神の中に人間の理解を超えた善と悪とが混在する矛盾を知り、また、「人間は神について意見をもつべきでないし、ましてや神でさえ持っていない知恵を持つことは許されない」（Jung, 1952, 30 頁）という神の考えを理解し、平身低頭して受け容れることによって、最後には神を鎮めたのである。ここでヨブが払った犠牲は、元々ヨブ自身が望んだものではなかったが、自らに与えられた運命を主体的に受け容れることによって、ヨブ自身の個性化と神の変容を実現するものとなった、といえよう（山本、2011）。

このことを Frankl の論に沿って言い換えると、まず第一に、「そもそもわれわれ人間が人生の意味を問うべきなのではなく、われわれ自身が問われているものであり、人生がわれわれに出した問いにこたえなければならないとい

うこと」(Frankl, 1995, 68 頁)である。第二に、究極的な意味——そのことを Frankl は「超意味」と呼んでいる——は、人間の理解力を超えており、「われわれはただそれを信じるしかできず、またそれを信じざるをえない」、また、「たとえ無意識であっても、人は誰でもそれをとっくに信じている」(Frankl, 1995, 68 頁)ということである。そして、それが「進んで運命を引き受ける」(Frankl, 1947, 39 頁)ということになる。

そのように、人間は本来的に人生から問いを提起され、その問いに対して「裸の実存」で決断を下し、行動していくことで生きる存在である。人間の最も根本的な意志、最も根本的な欲求は、自らの人生を生きがいのある人生にしたいという願い、「自分の人生をできる限り意味で充たしたい」という「意味への意志」であり(山田 1999, 2 頁)、「何かを創り出したり、何かをしたり、何かを体験したり、誰かと出会ったりということを通して(Frankl, 1978, 54 頁)、その瞬間を意味で充たして生きていく。しかし、生きることに疲れると、しばしば「このような人生に生きる意味があるのだろうか」「このような状況で未来は開かれているのだろうか」「私の人生にまだ何か期待できるのだろうか」という答えの出ない問いの中で立ち止まってしまうことがある。Frankl は、アインシュタインの「自分の人生を無意味なものとする人は、単に不幸だけでなく、生きていくことさえ難しい」という言葉を引用し、「意味への意志は、成功や幸せにかかわる事柄であるばかりか、人の生存にかかわってくる事柄なのである」と述べている(1978, 43 頁)。そして、意味への意志が欠如した場合には、人は生の意味を疑い、絶望や自殺に至らしめられることにもなる、と Frankl は警鐘を鳴らしている(1947, 19-30 頁)。

先述のように、人間の最も本来的な志向が、自分の人生を意味で充たし、生きがいのある人生にしたいというものであるために、その逆ともいえる苦痛、悲哀、悔恨に満ちた人生や、人生における虚無感、空虚感といったものは、あってはならぬもの、できるかぎり遠ざけるべきものとして受け取られがちである。しかし、Frankl はそういった人間の苦悩に正面から向き合い、それが必ずしも忌むべきものではなく、与えられた苦悩にいかに耐えるか、いかに受

け止めるかということに大きな価値があることを示している。著書『それでも人生にイエスと言う』の中で、Frankl は、「運命は人生そのものに属しています。苦悩もそうです。ですから、生きることに意味があるなら、苦悩することにも意味があります。それで、苦悩も、それが必然であるなら、意味をもつ可能性があります。実際に、それは広く一般に意味のあるものとして認められ評価されてもいます」と平易な文章ではっきりと述べている（1947, 41 頁）。

Frankl の思想において苦悩が取りあげられるのは、必然的な苦悩をいかに耐えていくかという意味においてである。よって、容易に避けることのできるような「不必要な」苦悩は論外であり、必然的な苦悩とは、死や治癒不能の病、愛する者との死別といった不可避で運命的な苦悩をいう（梶川、2009）。「自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるか、その事実にどう適応し、その事実に対してどうふるまうか、その運命を自分に課せられた『十字架』としてどう引き受けるかに、生きる意味を見いだすことができる」と Frankl は語っている（1947, 72-73 頁）。

変えることのできない運命は、先述のような死や病といったもののみではなく、過去のすべてもそうである。過去はすべて過ぎ去った出来事として変えることができない（山田、1993）。未来の死、過去の不幸といった、変えることのできない運命を、あたかもあつてはならぬこととして葬り去ったり、無理に曲げて解釈するのではなく、事実を事実としてどのように受けとめ、位置付けていくかは、まさにその人の現在にかかっており、それが Frankl のいう「態度価値」の実現であるといえよう。運命的な出来事を人生からの問いかけとしてとらえ、「逃げずに耐え抜く」姿勢をとるときに、人は「人間にできる最高の行い」をもって「意味のある人生を送ることができる」と Frankl は言う（1947, 42 頁）。つまり、人間は苦悩を体験することを転機として、人生に新たな意味をもたらしたり、内面的な成熟をとげて人生の次なるステージに歩み出す糧としたりすることができるといえよう。

次章では、筆者がインタビュー調査で出会った生体腎移植のレシピエント A

さんの言葉をもとに、「人生の転機」についての考察を深めたい。

III. 移植患者 A さんの場合

筆者は、生体腎移植の患者およびその家族の心理的な援助体制の構築を目的として、関係者にインタビュー調査を行っている。レシピエント A さんには、移植の約 3 か月前と、移植の約 4 か月後の 2 度にわたって、その体験についてなるべく自由に語ってもらう形で話をきいた。なお、A さんからは、研究目的での情報の公開について了承を得ているが、プライバシー保護のために、事実の一部に改変を加えている。

事例中、「」内は A さんの発言、<>内は筆者の発言、『』内はその他の人物の発言を示す。また、移植をうけた年を X 年とする。

1. 事例の概要と A さんの語り

A さんは 30 代後半の男性。X-11 年頃から糖尿病を患う。X-2 年に急激に腎機能が低下し、X-1 年に血液透析導入。仕事と透析の両立が体力的にも時間的にも難しくなり、透析導入とほぼ同時に大学卒業後勤めていた会社を退職し、現在は両親の営む自営業を手伝っている。X 年に 60 代後半の母親から腎臓を移植し、現在に至る。家族は他に父親と既婚の兄妹がいる。A さんは両親の家から「車で 20 分」ほどの場所に一人暮らしをしている。

① 移植 3 か月前の A さんの語り

学生時代の不摂生が祟ったのか、X-11 年ごろに糖尿病の診断を受けるが、その後も病院で指示された食事制限などは殆ど守らぬまま、また通院もせぬまま過ごしていたところ、X-2 年のある日起きたら目が見えなくなっており、急きょ入院。手術をして目は見えるようになったが、医師から腎機能が急激に低下しており、近い将来透析が必要になること、また、透析よりも移植が望ましいことを告げられた。糖尿病を患った時点から「ちゃんと自己管理をしてれば、そこで踏み留まれたのに、それをしなかったから、こう追いつめられて。でも、病気に教えてもらうことも結構ある。言ってもわからないと叩かれるの

と同じで、病気ってものは体罰に近いものがある。おかげで闘病という形だけど、規則正しい生活とか自分に厳しくすることは大事だってことがわかった。そういうプラス思考なので、病気に飲み込まれることはないです」。

X-1年の透析導入時の医師との面接に両親が同席した際に移植の話が医師から出されたところ、母親が腎提供を申し出てくれ、1年後に移植を目指すこととなった。母親に理由を尋ねると、『子どもに（腎臓を）あげるのは当然』との答えが返ってきた。そうであるならば、「自分の中には母の一部が生きている」のだから、「母に万一のことがあった場合にも、自分が犠牲になるのはむしろ罪」。母親の「恩に報いる」ためには、母親がしてくれたのと同じように「次の世代に何かを残すべき」なので、母親に孫の顔を見せたい。移植にあたっての唯一の懸念は、兄と妹が母親のことを心配して移植に反対したこと。現在（移植3か月前）は「消極的賛成の状態にまで」なっているが、今後もし母親が他の原因で亡くなったとしても、兄と妹が腎提供のせいにするのではないかという懸念がある。

移植が成功したら、「まずは食事制限を気にせず、楽しみたい」。現在は、家族や同僚らと食事をすると、Aさん本人は「食べられないこと、飲めないことをさほど気にせず、楽しく喋ってる」つもりでも、周囲が気を遣い、次第に誘われなくなったり、また、自分も出かけていくのが億劫になったりしている。「透析してる人間がいるだけで、周りがこんなにぎくしゃくするのか」と思い知った。

Aさんは数年前からブログを書いている。当初は「半分遺書のつもり」で始めたブログであるが、同じく腎臓を患う読者が数十名、更新を待っており、様々な書き込みがなされていることを思うと、「後に続く人に自分にできることを伝えようという責任感と、（ブログを元に）本かけるんじゃないの？というプラスの考えが出てきた」。ここに至るまで、「はじめは暗いこと書いてて、そのうち、これは恰好悪いなと思って、いいことばかり書いて…。でも、いいことばかりって、そんな毎日ないんで、辛いこととか、心の闇をかき出すしかなくなってきて、こんなんでもいいんかと思ったり…」といった逡巡もあっ

た。しかし、「昔は教会に行って神父に言わなあかんかったんちゃうかな」ということを、ブログでは「名前も顔もわからんところで、お互い遠慮なく言い合える」という意味で、「ブログを上手く使えてる」。

あとは移植の日を待つばかり。医師を信頼しており、特に不安はない。

病気になったことで、「自分を大切に思ってくれている誰かがいるということ」、「人間は一人で生きていくようだけど、結局は誰かに生かされているということ」に気付かされた。「自分に火の粉がふりかかるのとふりかからないのとでは全然違いますから」。

② 移植4か月後のAさんの語り

インタビューの第一声が「移植は思ったより大変でした」。移植後の尿の出が悪く、移植後すぐに再手術を受けた。「自分の痛みとかつらさとかっていうのよりも、せっかく、母が提供してくれた、その思いが無になるのだけはちょっとつらいなっていう、母に対する気遣いとか、母の努力が水の泡になるんじゃないかっていう心配が強かった」。

現在は検査の数値的にはかなり安定している。しかし、「(免疫抑制剤のために)免疫が落ちてるっていうのもあるんで、自分を守ることに対して、精神的にもやっぱりナーバスになってるっていうのはわかります。電車乗るっていうことに対する意識も、前とは違って、もうそれこそね、原子炉に近づくような緊張感」。<電車でたくさんの人と接することが心配?>「うん。気分的には完全防護で入らなあかんみたいな感じなんですけど、実際、マスク一個つけてるだけで。移植してからは、なんか、すごい、こう、身体の中に守らなきゃいけないものがあるっていう意識が強くなりますね」。

移植直前に母親に後悔しないかということを確認に行き、『自分にとっては一番の幸せだ』という返事もらった。しかし、移植手術が無事終わり、「今までためらってたものが、実際に行われてしまったので、その分、上乘せて自分の人生をもっと上向きにもっていかないと、提供してくれた母に申し訳ないし、長い時間、世話してくれた病院のスタッフの人たちの思いとか、努力っ

というのを無駄にしちゃいけないとかっていう、いろんなものを背負ったという意識はあります。とりあえず1つ壁は越えたけれど、ここから先は新しい課題を自分に課さなきゃいけないみたいなプレッシャーとの闘い」。兄と妹からは移植前に、『ここまできたらしょうがない』という「一応の同意」を得ることができたが、『『しょうがない』という言葉の裏に不同意を感じる』。母親に万一のことがあった場合に、兄や妹から「責められる」とつらいので、母親のことは「ちゃんと最後まで責任をもってみなきゃいけないっていう意識」がある。

移植を行って、病院に頻繁に通う必要がなくなった「開放感」と、病院から離れている間に何か起こらないかという「不安」の両方の「せめぎあい」。「今は通院するわずらわしさよりかは、病院でまめにチェックして、何かあったときは早く判明してセーブしたいっていうほうが強い」。

このように、様々な不安を抱えているが、移植前に比べると、移植後の生活などについて書かれた書籍やブログなどの「情報ソース」が殆ど見当たらず、「自分が手さぐりで生きていくしかないのかな」。<病院で情報は得られない？>医師には「漠然とした疑問はぶつけにくい」し、病院で出会う他の患者とは「同病相哀れむというのは避けたいので、仲良くなりたいとは思わない」し、「同じ境遇の人のサンプルデータはあてにならない」。<Aさんご自身のブログは？>「続けてますよ。1日に200アクセス以上あることもある。自分が足跡をつけたところで向こうが安心するのなら（ブログを続ける甲斐がある）。今まではみんなが踏み分けた道を自分も歩くことができたけど、移植後はそこを歩いた人が少ないから思ったより大変。自分で草を刈って自分で道を作らなきゃいけない。俺は俺の道に、自分で答えを見つけなきゃなって」。

移植後の生活は「思ったほど自由じゃない」。「自分の健康状態に自信が持てないし、いつまで、こういう生活ができるのかなって、人生に安定感を感じられないので、ドミノが倒れるみたいな感じで、マイナス思考がはじまりそうなときもある」。そんなときに、医師や看護師から『もっと前向きに生きなきゃ。まだまだ恋なんかもできますよ』などと励まされるが、「じゃあお前は

俺を（恋愛の）対象として見られるのか？ってききたくなる。できないだろ。病人とか障がい者だとか思うだろって。そんな励ましは、移植して治っても、100%元には戻れないってことを再認識することにつながるんだよ。

「これは人生のことですけど、悩みって1つ解決したら、別の次元の悩みができるのと一緒に、移植したらしたで、守らなきゃいけない努力とか、自分の環境をメンテナンスしなきゃいけない気配りっていうか、例えば、免疫抑制剤を1回忘れたけど、まあいいやって感じじゃなくなってくる。そのへん、胃薬とか風邪薬を飲み忘れたっていう次元じゃないっていうのがあってね…。生きるって難しいです」。

<移植してご自身に何か変化はあったと思われますか？>の問いには、「ありました」と断言。「一言で言うと、慎重になりました。軽はずみなこと、不注意、つまらないミスを罪だと思うようになりました。だから、よく言えば、自分に厳しく前向きになったんですけど、その弊害として、人にも厳しくなって、ルーズな人を寄せ付けなくなったところがあるんです。頼むから私には何も害を及ぼさないでねって。守りに入って、ナーバスになってるんですかね。（中略）人生の精算は、最後にピリオドを打ってから評価が決まるけど、今は暫定的にちょっとマイナスかな」。

2. 事例の考察

上記の事例は、筆者が拙稿「『生きる』ことに関する一考察」（2015）において、人が苦しみを乗り越えて「生きる」とはどういうことなのかについて論を展開するために用いたものである。その論を踏襲しつつ、新たな角度からの見方を加えて、「人生における転機」について論じるため、同じ事例についてさらに掘り下げて考察する。

Franklは『それでも人生にイエスと言う』（1947）、『夜と霧』（1977）で、強制収容所における被収容者の心理を3つの段階にわけて分析している。生体腎移植のレシピエントと強制収容所の被収容者の心の動きが全く同じであるということは決してないが、望まぬ運命からの働きかけに苦悩するという共通

点を対照するため、レシピエント A さんの語りを 3 つに区分して考察する。

① 第一の段階

Frankl は「強制収容所の心理学」の第一の段階を「入所ショック」の段階と名付けている（1947, 120 頁）。全てをとりあげられ、『裸の』実存」になり、それまでの「全人生にきっぱり始末をつける」段階における「ショック」である。玉井（2016）も指摘しているが、ここで言われる、これまでに積み上げてきた全てを理不尽に奪われた状態である「裸の実存」と、II 章でも述べた、苦悩によって「本質的でないもの」が全て焼き尽くされ溶け去った状態である「裸の実存」とは、その人の「本質的」な部分であるという点においては一致しているが、ニュアンスとしては、「実存」のネガティブな側面とポジティブな側面の両面が使い分けられていると考えられる。

A さんの場合、「入所ショック」の段階にあたることについて多くは語られていないが、「ちゃんと自己管理をしていれば、そこで踏みとどまれたのに」、「病気ってものは体罰に近いものがある」などの言葉から、糖尿病、腎不全、そして透析或いは移植の必要性の宣告に対する「ショック」の存在が感じられる。また、兄と妹がドナーである母親のことを心配して移植に反対したことも、A さんにとって、「ショック」の一要素であったであろう。食事の席に誘われなくなったり、勤めていた会社からの退職を余儀なくされたり、きょうだいの中で孤立したりと、それまで当たり前のように A さんの周囲にあったものがなくなっていく段階といえる。

② 第二の段階

Frankl は第二の段階を「無感情（アパティー）の段階」と言っている（1947, 124 頁）。自分の運命に対する無関心が進み、「その日一日をなんとか生き延びることにだけ全力が注がれるようになり」、その他のことに対しては「心は殻をかぶって」しまう。そうすることによって、心は「流れ込んでくる出来事の圧倒的な力から身を守り、均衡を保とうとする」のである（1947, 123

- 124 頁)。そのような状況下でも、人間には「自分の運命に、自分の環境に自分なりの態度をとるという人間としての自由」がある。しかし、その自由を保持し、自分の心を「没落」させずにいるためには「心の支え」が必要である(1947, 128-129 頁)。心の支えをなくし、なかでも、将来を支えにすることができなくなると、「精神的心理的身体的な衰退」につながってしまう(1947, 133 頁)。

Aさんは、自己管理ができなかったがゆえの悔いの残る闘病生活への「入所ショック」の後、「半分遺書のつもり」でブログの執筆を始める。「はじめは暗いこと」を、そして、それでは「恰好悪い」と思って「いいことばかり」、しかし、それではやっていけなくなって、「辛いこと」や「心の闇をかき出すしかなくなってきて」…と、心の逡巡がみられる。その後、ブログの執筆が、「神父」に告解するような意味合いをもつ目的、そして、匿名で匿名の相手に聞いてもらう目的、やがて、Aさん自身が「ブログの更新を待っている」人たちの「神父」の役割を担う目的というように、少しずつ形を変えながら、Aさんが自分のところを没落させずにおくための「心の支え」になったものと考えられる。「入所ショック」直後の起伏のある感情の吐露と比べると、Aさんのブログ執筆という行為は、時を経てだんだん「殻」をかぶって感情をおさえたものになり、自分の運命に直接的に向き合うというよりも、「ブログの更新を待っている」人たちのためというような、自らの運命に流れ込んでくる圧倒的な力からは一歩退いた、どこか冷めた視点が感じられる。

しかし、苦悩によってもたらされた「誰かに生かされていること」への気づきが、Aさんを、自分も「後に続く人に自分のできることを伝えようという責任感」に導いたものともとらえられる。他者から必要とされることは、自分の存在意義の実感へとつながり、それが生きていく上での心の支え、生きる意味ともなりうる(山本、2016)。Aさんはその意味で、自らの病や、それにまつわる将来への不安、人間関係への不安などといった苦悩をひとつの転機として、「プラス思考」で生きる意味を見いだしたといえよう。

Aさんのように、自ら「心の支え」となるものを見つけることができる人が

いる一方で、それができずに、心理的に落ち込み、身体的にも衰えてしまう人もいる。Franklは、そういった人に対して、「心の癒し」をもたらすことが、「心の医者」の任務であると説いている（1947, 134頁）。筆者も、心理臨床家として、移植医療の中で、苦悩のうちに意味を見いだせずにいる人が「心の支え」、「心の癒し」を得る援助体制を構築すべく、調査研究を行っている途上である。

③ 第三の段階

Franklは第三の段階を「解放された囚人の心理学」と位置付けている（1947, 139頁）。ここでFranklは人間の心を丸天井の構造にととえて、「すべてを体験し生き延びた」被収容者が強制収容所を解放された後に、心が危険にさらされる危険性を説明している。重荷を載せることによって支えることができているがたがたの状態の丸天井と同じように、「人間の心も、すくなくともある程度まで、ある範囲までは、『重荷』を担うことでかえってしっかりする」。そこで、苦悩に満ちた強制収容所を生き抜いた多くの人が、ともすれば被収容前の状態よりも「しっかりした」状態で収容所を出ることができたといえる。しかし、解放によって急激に重荷が取り除かれると、高水圧の海底に潜っていた人が段階を踏まずに通常の気圧に戻ってしまったとき潜函病にかかるのと同様に、きわめて重い身体症状があらわれるというのである（1947, 138頁）。精神的な抑圧から急に解放された人間が陥りやすい状態をFranklは数例挙げている。ひとつは、「今や解放された者として、今度は自分が力と自由を意のままに、とことんためらいもなく行使していいのだと履き違える」人々。また、「自由を得てもとの暮らしに戻った人間の不満と失意」などである。被収容者たちは、「苦悩と犠牲と死に意味をあたえることができるのは、幸せではない」ことを知っていたのにもかかわらず、「不幸せへの心構え」ができていなかったため、いざ解放されて得たはずの自由の中で出会った不満や失意を乗り越えるのは容易ではなかったのである（1977, 152-156頁）。

移植後のAさんは、尿の出が悪く再手術を要したという思わぬトラブルは

あったものの、その後の身体的な経過は良好で、客観的、数値的には QOL も向上しているにもかかわらず、「自分の健康に自信が持て」ず、「ナーバス」で、「マイナス」の状態にある。

Aさんは、通院のわずらわしさから解放され、却って病院から離れることによる不安が大きくなったということを述べている。また、移植前には食事制限を気にせず家族や同僚との食事を楽しみたいと語っていたのに、移植後は人との接触に「原子炉に近づくような緊張感」に苛まれ、「頼むから私には何も害を及ぼさないでね」と人を寄せ付けず、「守りに入っている」。医師や看護師に『「まだまだ恋なんかもできますよ』と励まされ」たことが、「100%元には戻れないってことを再認識すること」につながったと認識している。

Aさんは糖尿病の宣告を受けてから11年のうちに、自分が「病人」であるという苦悩を一旦は引き受け、それを転機として、意味への意志をもつ存在として新しく歩み始めていたはずであった。そして、「プラス思考」で移植に臨み、輝かしい未来が待ち受けているはずであったのに、実感としては、「思ったほど自由じゃない」、他人からは「病人とか障がい者」と思われるような、100%元に戻れたわけではない自分の現在の状態を、Aさん自身が受け入れることができず、移植はAさんにとって今のところは有意義な転機とはなりえていない。

しかし、生きることに意味があるだけでなく、苦悩することにも意味がある。不満や失意の中にあるとしても、「私たちが時間の中で創造したり、体験したり、苦悩したりしていることは、同時に永遠に向かって創造し、体験し、苦悩している」ことだと Frankl は述べている。よって、私たちは、「まだ起こっていないことをまさに起こすよう、責任を自覚しなければ」ならない。(1947, 138頁)。責任をもって行動することで、その行動に意味が生まれ、有限なものに無限の可能性を与えることも、その可能性を自ら肯定することもできる。

現在のAさんの状態では、母親に「万一のこと」があったり、それに対して兄や妹から非難されたり、或いは自らの健康状態によくない変化があったり

すれば、「ドミノが倒れるみたい」に、マイナス思考の連鎖にとらわれてしまう危険性もある。しかし、Aさんの「俺は俺の道に、自分で答えをみつけなきゃ」という言葉には、自らの人生を自ら担う責任、人生を肯定する責任の萌芽がみられるようである。よってこの第三段階における苦悩も、意味ある一つの転機であったとAさん自身が認識できる日もそう遠くはないと考えられる。

IV. まとめ

人は一本の川をただただ押し流されるように、運命になされるがままに生きているわけではない。人生は好む、好まざるにかかわらず、転機の連続であり、意識的に、或いは、無意識のうちに自らの歩む方向を選びとっている。予想もしないような運命が、ときには理不尽としか思えないような形で、私たちの生きる道の途上に立ち塞がり、不本意な転機を強いられることもある。或いは、抗いようのない苦悩の重圧の中、身動きがとれなくなってしまうこともある。

本来、人は人生を意味で充たし、充実した生きがいにあふれた人生にしたいと願う存在である。よって、自分の生きる意味や価値が見いだせなくなったり、運命の荒波に翻弄されて方向性を見失ってしまったり、乗り越えがたい苦難を前に立ちすくんでしまったりしたときには、過去にこだわったり、或いは、ただただ自分の運命の理不尽さを呪ったりすることで、説明のつかない苦悩をなんとか埋め合わせようとする。

しかし、Franklは、このようなときにこそ人間に必要とされているのは「生命の意味についての観点の変更」であると説き、人間が「人生から何を期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題である」と、人生観のいわゆるコペルニクスの転回の必然性を提示している（1977, 184頁）。また、Franklは、

「生きるとは、問われていること、答えること

——自分自身の人生に責任をもつことである」（1947, 57頁）

とも言っている。人生における様々な出来事を人生からの問いかけととらえ、

自らの責任においてそれらを受け止め、応答していくことで、人生を意味で充たして生きていく契機とすることができる。

人生からの問いかけのなかでも、容易に答えを出すことができないような苦悩をいかに耐え、いかに自らの転機として活かすことができるかということに、人間の真価が問われるといっても過言ではあるまい。

よく生きること自体に意味があるだけではなく、そのために苦悩することにも絶対に意味がある。そして、その苦悩は自らの責任で自らが引き受けなければならないものではあるが、さらに深い危機状態を招きかねない危険性もはらんでいるため、そこに臨床心理学的な立場からの介入が必要とされることも十分に考えられる。

移植医療の現場では、まだまだ臨床心理学の立場からの心のケア体制が整っているとは言い難い現実がある。すべての患者が心のケアを要するというわけではないが、これから更に幅広い観点からの考察を深め、ケア体制の充実を図ることが急務であると考えられる。

付記：関係者のプライバシー保護の観点から、本稿中の事例の引用は差し控えてください。

V. 参考文献

- Frankl, V.E. 1947. “…Trotzdem Ja zum Leben sagen” 山田邦男、松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』春秋社 1993.
- Frankl, V.E. 1948. “Der unbewußte Gott”, 1951. “Logos und Existenz—Drei Vorträge” 佐野利勝、木村敏訳『識られざる神』みすず書房 2002.
- Frankl, V.E. 1977. “Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager”, … trotzdem Ja zum Leben sagen. 池田香代子訳『夜と霧』みすず書房 2002.
- Frankl, V.E. 1978. “The Unheard Cry for Meaning.” 諸富祥彦監訳、上嶋洋一、松岡世利子訳『<生きる意味>を求めて』春秋社 1999.

- Frankl, V.E. 1984. "Homo Patiens: Versuch einer Pathodizee." In *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. 山田邦男、松田美佳訳『苦悩する人間』春秋社 2004.
- Frankl, V.E., Kreuzer, F. 1986. "Im Anfang war der Sinn—Von der Psychoanalyse zur Logotherapie". 山田邦男、松田美佳訳『宿命を超えて、自己をこえて』春秋社 1997.
- Frankl, V.E. 1995. "Was nicht in meinen Büchern steht." 山田邦男訳『フランクフルト回想録 20世紀を生きて』春秋社 1998.
- Jung, C.G. 1952. "Antwort auf Hiob." 林道義訳『ヨブへの答え』みすず書房 1988.
- 梶川哲司. 2009. 「苦悩の意味可能性について——フランクルの苦悩体験をたどって」 フランクフル研究会発表
- 梶川哲司. 2014. 「『それでも人生にイエスと言う』をめぐって ～神谷美恵子の生きがい論を手がかりに」 フランクフル研究会発表
- 梶川哲司. 2016. 「『それでも人生にイエスと言う』の「I 生きる意味と価値」を読んで」 フランクフル研究会発表
- 日本聖書協会. 1995. 『旧約聖書』
- 玉井久之. 2016. 「人生にイエスと言う」 フランクフル研究会発表
- 山田邦男. 1993. 「解説 フランクルの実存思想」. Frankl, V.E. 『それでも人生にイエスと言う』春秋社, pp.163-217.
- 山田邦男. 1999. 『生きる意味への問い——V・E・フランクルをめぐって』佼成出版社
- 山田邦男. 2002. 「現代の精神状況とその超克——フランクルを手がかりとして」 山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社, pp.290-349.
- 山本典子. 2010. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 —グリムのおとぎ話『七羽のからす』をとおして—」『Humanitas』Vol.35, pp.39-49.

- 山本典子, 高原史郎. 2010a. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 I 腎提供という体験」『今日の移植』 Vol.23, pp.157-162.
- 山本典子, 高原史郎. 2010b. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 II 腎提供という体験」『今日の移植』 Vol.23, pp.277-282.
- 山本典子. 2011. 「生体腎移植のドナーに関する臨床心理学的考察 — C.G.Jung『ヨブへの答え』をとおして—」『Humanitas』 Vol.36, pp.23-33.
- 山本典子. 2012. 「医療の現場における臨床心理学の研究について —生体腎移植に関する研究における一考察—」『Humanitas』 Vol.37, pp.39-52.
- 山本典子. 2014. 「生体腎移植のドナーが『イエス』と言うとき — Viktor E. Frankl『それでも人生にイエスと言う』を援用して—」『Humanitas』 Vol.39, pp.21-34.
- 山本典子. 2015. 「生きがいに関する一考察」『Humanitas』 Vol.40, pp.21-35.
- 山本典子. 2016. 「『生きる』ことに関する一考察」『Humanitas』 Vol.41, pp.23-37.

(奈良県立医科大学非常勤講師・心理学)